

第3回 ふくい建築賞 2016

受賞作品

【一般建築部門】

最優秀賞

むらかみ食堂

設計者：伊藤瑞貴建築設計事務所

伊藤 瑞貴

施工者：山崎建設(株)



【住宅部門】

最優秀賞

CUBOID HOUSE

設計者：(株)アルス建築事務所

乾 彰宏

施工者：(株)深谷



優秀賞

めいりん保育園

設計者：(有)赤土善蔵アトリエ

赤土 善蔵

施工者：(株)キハラコーポレーション



優秀賞

現代美術館の家

設計者：

一級建築士事務所 藤木建築研究室

藤木隆明・佐藤由紀子

施工者：(株)松田工務店



優秀賞

MAGIC SQUARE

設計者：(株)木下設計 木下 貴之

施工者：(株)見谷組



優秀賞

村国の切通し

設計者：丸山晴之建築事務所

丸山 晴之

施工者：(株)木だて家



入選

大山クリニック

設計者：(有)小笠原弘建築計画

小笠原 弘

施工者：(株)活衛工務店



第3回ふくい建築賞 2016 報告

ふくい建築賞実行委員会

瀬戸川 信之

建築士会・建築士事務所協会・JIA建築家協会の設計3団体が主催し、福井県民に対して「優れた建築とは何か」について関心を高め、福井県の建築業界全体の人材育成を目的に一昨年創設された第3回「ふくい建築賞」には、建築関係9団体の協賛と県・福井市をはじめマスコミ4社の後援をいただきました。感謝申し上げます。

この建築賞の特徴は、応募対象者を「福井で活動する設計者」としたこと、対象を「一般建築」と「住宅」の二つの部門に分けたこと、選考過程の透明性を保つため最終審査会を広く市民に公開することです。

本年度は6月20日から8月15日までの応募期間に、一般建築部門10点、住宅部門9点の合計19点（昨年18点）の作品応募がありました。

実行委員会の事前審査を経て9月2日、建築士事務所協会会議室にて一次書類審査を行いました。昨年と同じく水野一郎氏（金沢工業大学教授）、吉田純一氏（福井工業大学教授）、高嶋猛氏（福井大学講師）の3名の審査委員による審査を経て一般5点、住宅5点の計10点が二次審査対象作品に選ばれました。

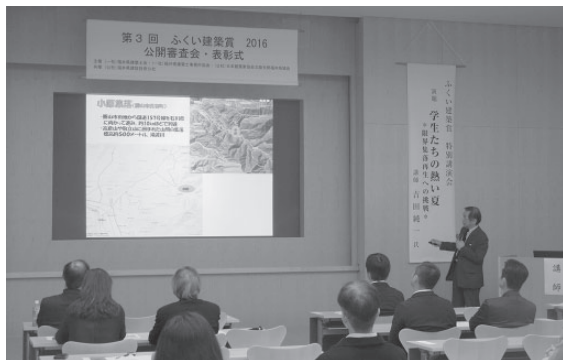
二次審査は9月30日、10月1日の2日間にわたり3名の審査委員が現地の建築を訪れ、直接設計者の説明を聞きヒアリングを行い、その後の審査の結果、一般部門では「めいりん保育園」「むらかみ食堂」「MAGIC SQUARE」の3点が、また住宅部門では「現代美術館」「村国の切通し」「CUBOID

HOUSE」の3点が最終審査対象作品に選ばれました。また本年度から新たに設けられました「入選」作品として「大山クリニック」（設計者：小笠原弘氏）を選考しました。

11月5日（土）県立図書館多目的ホールにて会場一杯の約100名の市民が見守る中、最終審査会が開催されました。開催に先立ち審査委員を務める吉田純一先生により「学生たちの熱い夏」と題した講演会が行われ、勝山市北谷町小原集落における「小原ECOプロジェクト」活動が紹介されました。

引き続き公開審査会に入り、ノミネートされた6作品の設計者によるプレゼンテーションと質疑応答の後、それぞれの建築の魅力や課題が熱心に議論されました。そして審査委員3名による投票の結果、一般建築部門では「むらかみ食堂」（設計者：伊藤瑞貴氏）、住宅部門では「CUBOID HOUSE」（設計者：乾 彰宏氏）がそれぞれ名誉ある最優秀賞に決定しました。

会場には作品を紹介するパネルと共に、「私たち



吉田純一先生による講演会

が担当しました」と設計者・工事を担当した職方の名簿も今年から初めて展示しました。最終審査に残ったいずれの作品も、施主施工者との良好な関係性が感じられ、同時に様々な視点から「福井らしい建築とは何か」を捉え、創造性を建築という実体を実現していくために高い技術に挑戦する姿勢が感じられました。

会場には多くの聴講者が集まり、熱い熱気に包まれました。審査委員の先生の緊張感もピリピリと伝わってきました。参加した市民の方々にもアンケートを実施し「あなたが選ぶ最優秀賞は？」のほか率直な意見、感想を書いていただきました。これら貴重なご意見を今後、賞の運営に反映できるよう実行委員会でも検討したいと考えています。

この「ふくい建築賞」が永く続けていけるよう皆様のご理解と温かいご支援を心よりお願いします。会員のみなさま、作品の応募参加を来年もお待ちいたしております。



授賞式記念撮影

■ 第3回ふくい建築賞2016 総評

「対話の積み重ね」

審査委員長 水野 一郎（金沢工業大学教授）

「ふくい建築賞」は第3回を迎えました。この賞は福井県の建築設計に係わる3つの組織（建築士会・事務所協会・建築家協会）が一つになり、自らが切磋琢磨して福井の建築文化を向上させようと立ち上げたものです。従って応募者は福井県在住の建築士であり、応募作品は福井県内に立地する建築です。審査委員は初回から福井大学（高嶋）福井工大（吉田）金沢工大（水野）の教員3名です。

今回は一般建築部門10点、住宅部門9点の応募があり、一次審査は応募書類により一般建築5点、住

宅建築5点を選考し、二次審査は2日間に亘る現地審査でそれぞれ3点づつを選び最終審査の対象作品としました。恒例の福井県立図書館での最終審査はご存知のように施主、建設業者、設計者の他に一般県民も参加しての公開審査で行われました。

今回も質の高い6作品が揃いました。いずれも第1・2回と同じく施主と設計者がどのような建築にするかの対話を積み重ねながら個性的な内容に高めた作品を生み出していることが印象的でした。両者が話し合うことが往々にして没個性的な平均点に落ち落ちてしまいがちですが、独自のデザインに到達していることがすばらしい、このあたりが福井の県民性や価値観と通じているように思え「福井らし

さ」かなと評価しています。

次に印象的だったのは立地環境と建築との対話です。環境との対話というと一般に「調和」が語られますが、「対立」を持ち込むこともあります。今回の6作品いずれも周辺環境と調和を図りながらも、対立的なデザインが採用されていて刺激的なクリエイティビティを環境に投げかけ活性化させています。

以上のように対話を重ねて個性や対立を創り出しているという視点で、最終選考に残った6作品を再度見直していただけたら幸いです。

最優秀賞は一般部門で「むらかみ食堂」、住宅部門で「CUBOID HOUSE」が選考されました。毎回のことながら一つを選び出すのには苦勞します。結

論としては3審査委員の投票点数の合計点で決めています。それ故に審査委員各人にも自己の評価基準からみて納得がいけない結果という場合もあります。今回も若干評価がバラついたので審査委員だけではなく、会場の参加者の中にも「うーん、そうかな」と思われた方もいるでしょう。そのような審査経過を顧みるに、公開会場にて各審査委員の評価についてもっと丁寧に議論しあうのが必要ではないかと思います。そして審査投票の合計点で決めるのは止むを得ないにしても、選考結果に納得しながら自分は別の選考だと確認することが出来れば理想的です。ここでも良い建築のためには「対話の積み重ね」です。

■ 第3回ふくい建築賞2016の審査を終えて

審査委員 吉田 純一 (福井工業大学)

「ふくい建築賞」の審査も3回目となり、いくぶん慣れてきたようで、余裕をもって審査に当たられたように思う。再三触れてきたように「建築=建物+人」の持論にブレはなく、今回も建物と人との関わり方が主要な視点になったことは言うまでもないが、今振り返ってみると、今回は無意識のうちに建物そのものの機能性や美しさ、あるいは地域とのかかわり方も重要な評価の観点になっていたように思う。

一般建築部門の応募作品は10点であった。昨年は8点で、その中に形式的には住宅に類する作品が3点含まれていたが、今回はほとんどの作品が私がイメージする一般建築であり、充実感を覚えました。これらの中からめいりん保育園と坂井こども園、むらかみ食堂、MAGIC SQUARE、大山クリニックの5点が2次審査へ進み、現地審査を経てめいりん保育園、MAGIC SQUARE、むらかみ食堂の3点が選考された。これら3作品は幼児施設、事務所、医療施設とそれぞれ性格や機能が異なり、最終審査では悩んだが、結果的にはむらかみ食堂を推薦した。大学に勤めながら農家の長男坊として農作業にも関わっている私にとって、これからの農業と建築の関わり方にひとつのヒントを与えてくれたこと、建築的にも福井のあちこちにみられる農村集落の風景にうまく溶け込み、小規模ながらも豊かな空間を創造していること、その中で自作の農産物を食材として提供し、来客はゆったりとした田園風景も味わうこ

とができると思ったことなどに共感を覚えたからである。MAGIC SQUARE、めいりん保育園も捨てがたい作品であった。特に前者のMAGIC SQUAREはこれこそ私がイメージする一般建築であり、応募書類の写真にみる外観デザインも良く、1次審査では好印象を持っていた。ところが、2次審査で訪れた際、東側の外観や隅々まで行き届いた内部デザインは思った通りであったが、市街地からのアプローチ面、すなわち西側の外観からはまるで倉庫。周囲に高い建物がなく、この地域におけるランドマークとしての意味ももつ建築なのに…残念であった。後者は遊戯室や園児室、曲線状の廊下(通路)の取り方などはさすがだったが、園舎と中庭との関連性がやや希薄と感じた。管理上の問題はあろうが、中庭こそ園児が園舎から飛び出してのびのび自由に遊びまわれる場所であり、園舎と中庭のつながりに不満が残った。この他1次審査で選外となったものの、敦賀赤レンガ倉庫は県内における最初の近代建築の再生事例であり、興味深い作品であったが、古建築がもつ歴史性や材質感などが十分に反映されていない点に物足りなさを感じた。

住宅建築部門は9点で、昨年度より1点減であったが、内容的には充実していたように思う。このうち、和田邸、CUBOID HOUSE、村国の切通し、現代美術館の家、小浜鹿島の町家の5作品が2次へ進み、最終的にはCUBOID HOUSE、村国の切通し、現代美術館の家の3点が選考された。設計活動には

縁のない私にとっては3作品ともに甲乙つけがたいものだったが、間口が狭く、奥に長い、いわゆるウナギの寝床と称される旧来の伝統的な町家の敷地条件を苦にせず、豊かな内部空間を創りだしていたCUBOID HOUSEに特に目を奪われた。さらに町家は本来閉鎖的なものであるが、隣の空き地を活かしながら人を呼び込む、開放的な空間を創りだしている点もこれからの町家の有り方の一つとして興味深く、最優秀に選定した。現代美術館の家は大小のキュービックをつなぎ、外観、内部ともに白で統一した刺激的な作品で、まさに現代美術館を思わせる洗練された作品であったが、ここに自分が住むことを考えるとややビビってしまった。また、角地にあって通り景観的にも強烈なインパクトを与えることは間違いないが、開口部がなく閉鎖的でありすぎることに疑念を抱いた。切り通しの家は斜めに切った土間を介して庭と当家の神木をつなぐというコンセプトをもつ作品で、内部の1、2階の動線にも工夫がみられ、興味深い作品であった。しかし、現況では庭、神木がなく、今一つ切り通しというコンセプトも明確でなかった。庭園の整備、神木の再

生を期待したい。この他、最終選考には残らなかったが、小浜鹿島の町家は第1回において優秀賞を受賞し、小浜三丁町の町家改修を手掛ける設計者の作品であったが、住宅は出来上がっているものの未だ住人がおらず、生活感が感じられなかったのが残念であった。

3回の審査に関わらせていただいた今でも「ふくい建築」って何か？と問われても、皆目見当がつかず、答えられない。こんな私が審査委員を務め、主催者の建築士会や事務所協会、建築家協会の方々には大変なご迷惑をおかけしたと思う。水野先生と高嶋先生にはそれ以上にご迷惑をおかけしたはず。深くお詫びしたい。でも、私にとっては「建築=建物+人」という私の持論を改めて確信することができ、きわめて有意義で貴重な体験になった。改めてお礼申し上げたい。最後に「ふくい建築賞」がこれからも回を重ねながらより活発に展開され、福井の建築の発展に大きく寄与されることを、そして福井の建築士会・事務所協会・建築家協会のますますのご発展を祈念し結びとしたい。3年間ありがとうございました。

■ 第3回ふくい建築賞2016の審査を終えて

審査委員 高嶋 猛 (福井大学)

● むらかみ食堂

むらかみ食堂は、福井市南西部郊外の田園地帯に位置する。里山の景観を残す東山麓に緩やかにたたずむ集落の東端部にひっそりと建ち、背後の緑と伝統的な集落の景観との調和を図りながら建てられている。

30席余のこじんまりとした食堂で、自然食材の素材を大切にしたメニューを提供している。このコンセプトと立地条件から、形態と素材と色彩が選択されたと思われる。外壁の下見板張りは集落の土蔵の簷下見板張りと調和を狙ったものであろう。一転して、内部はテーブル・椅子とも木の素材を現した落ち着いた空間で構成され、東側の大きな開口部から望む田園や遠くの山々をごちそうにしている。この色彩と素材の境界となる開口部は、銜い無く枠材から素木を見せている。

外部の柱下部の扱いや室内の独立柱の角など、木の持つ素材の加工性を考えると、建築的にまだ優し

くできる余地は残されている。また、背面の設備機器の扱いにも、この建物の大きな特徴である「まき庫」等の工夫での景観的配慮が望まれる。

● めいりん保育園

福井市の市街地南部の住宅地に立地する保育園で、周辺は多くが2階建ての住宅である。東西2面の道路に面し、玄関を道路反対側に駐車場のある東側に配置し、西側は厨房への搬入経路とする。

建物の壁は全体が緩やかにうねり、全体としてやさしい表情を与えている。また、色使いも大胆で、子どもたちの活気を目指した空間構成が意図されていると感じられ、これらの形態がこの保育園を特徴付けている。その中で、ホール(遊戯室)は室内に面する部分を大きく開閉できる建具を持った楕円形平面とし、ハイサイドライトを採った気持ちの良い空間である。

敷地面積が制約された敷地で考え抜かれた平屋建の計画であるが、園庭が狭く、園庭と内部との関係も庇が短いため希薄になっていることにも工夫が欲しいと感じたのは欲張りであろうか。

●MAGIC SQUARE

福井市郊外の医療機器関連企業の分館である。敷地は本社社屋の西方約200mに位置し、西側を除く3方が道路に接する。

建物は5層の南北に長い平面形を採り、北側は5層の吹き抜け空間と上下階への交通空間とする。

1. 2階は倉庫で、上階は事務室や会議室とし、東面に休憩などの小空間を採ることでカーテンウォールに単調さに変化を与えている。また、各事務室等は要求された機能に基づいて空間的に変化を設けた構成を採っている。

建物の玄関を北側に採り、吹き抜け空間に玄関ホールとしての機能を持たせている。北側の大きなカーテンウォールから採光され、全体的に金属と黒の世界の印象が強い緊張感のある空間となっている。執務空間への導入部分としての空間であるが、もう少し暖かみが欲しいように感じられた。

東側の本社社屋側から望む構成は、夜間の照明計画も含めて見事であるが、西側敷地に増築を可能とした計画であるため、市街地からアプローチすると増築予定の西面がまず視界に入る。簡略された構成であることは理解できるが、色彩や開口部の扱いに配慮し、増築前の形態としても調和のある構成が望まれる。

●CUBOID HOUSE

福井市の市街地中央部の比較的家屋が密集した地域に建つ個人住宅である。道路を南側に持ち、道路際は東に少し張り出した南北に長いL字型の敷地である。改築前の住宅は南側からの採光をより多く確保するため、南側の間口いっぱいに東西に長く建てられていたが、今回は南北に長く西に寄せて建て、北側の住宅への通風と採光に配慮した配置計画としている。この周囲の環境への配慮は特に評価でき、また、住宅南側には住宅の第一リビングを配置して外部に開き、「まちに開いた」構成ともなっている。

南北に長い住宅は中庭を有効に配置しながら構成される。一番奥の老人室が孤立しないように脇に浴室を設け、1階のサービス動線の回遊性も確保されており、暮らし方にも良く配慮されている。外観構成や玄関から奥に向かう内部構成、高すぎない天井とその圧迫感を感じさせない手法なども見事である。

陸屋根に近い屋根形態で、積雪を少なくするためにパラペットを極力立ち上げないという構成により高さを抑えた外観構成のプロポーシオンも巧みである。ただ、北陸・福井の雨や雪が多い風土性を考えた時、軒や庇のない外部構成には疑問が残る。

●現代美術館の家

美術をこよなく愛し、自らも創作に励むクライアントからの、建物全体を展示空間とするような住宅への要望に対する提案である。

敷地は鯖江市の新興住宅地の南西角地である。大きさの異なる5つの白い箱によって平屋建で全体が構成され、道路に面する西側は閉鎖的な扱いである。南面は東西二つの箱を前後にずらして設け、その間に控えめに設けられた玄関を通して内部に入ると、空間は一変する。採光・通風に配慮しながらプライベート的な空間を確保するために、小さな庭を配置し、基本的に外部には閉じ、中庭に向かって開き、内外部とも白い箱とする空間はあくまでも明るい。ただし、壁面を大きく穿つように袖壁と庇を深く設け、福井の風土性に配慮した構成となっている。

白い箱を実現するために採用された外壁と地面との接点も見事で、照明や各種建築金物にも目が届いた、完成度の高い建築である。

●村国の切通し

敷地は越前市東部の集落の一角で、北と東に道路が通る。敷地西側に母家、南に納屋が建ち、北東の角地が今回の敷地である。この角地の北東部に庭を設け、その庭を囲むように建物はL字型の平面としている。玄関は敷地内部の南側に設け、道路際には塀と大きな門扉を設けている。

設計者が「切通し」と名付けたL形の中央部分がこの住宅を特徴付ける空間である。板床と土間による大きな吹き抜けは心地よい開放感があり、土間と外部との繋がりにも配慮された空間は見応えがある。また、バックヤードも充実している。

内外部とも屋根を支える大きな垂木がデザインの大きな要素となっているが、リズムの美しさが欠けている点や、西側外部の大きな目隠しの木製スクリーンが構造体ではなく、鉄骨が構造を引き受けている構成や、配線、設備機器の見え方にも配慮が加わっていれば、さらに完成度が高まったと思われる。



むらかみ食堂

設計監理：伊藤瑞貴建築設計事務所
施 工：山崎建設㈱

建築位置：福井市杉谷町
工 期：'14年3月～'14年9月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：498 m²
建築面積：91 m²
延べ面積：137 m²

むらかみ食堂は、「のどかな田園風景」と「食」と「農」を次世代の子供達につなぐことを目的とした、地元で収穫されたお米を中心とした農産物を提供する農家食堂です。福井市杉谷町は、30世帯程度の住宅が建つ小さな集落で、先祖代々にわたり世代を超えて農業に励んできた地域です。西側には城山、東側には農業振興地域に指定された水田が広がっており、遠くには白山連峰を見渡すことが出来ます。四季のうつろいを感じながら食を楽しむことの出来る、この場所に昔から建っていたような自然な佇まいの農家食堂です。この食堂が人と農業をダイレクトにつなぐことで、地元の活性化だけでなく、持続可能な地域文化のあらたな可能性を模索します。



めいりん保育園

設計監理：(有)赤土善蔵アトリエ
 施工：(株)キハラコーポレーション

建築位置：福井市花堂東
 工期：'10年9月～'11年2月
 増築：'13年1月～'13年3月
 構造規模：RC造・地上1階
 敷地面積：1,713 m²
 建築面積：928 m²
 延べ面積：915 m²

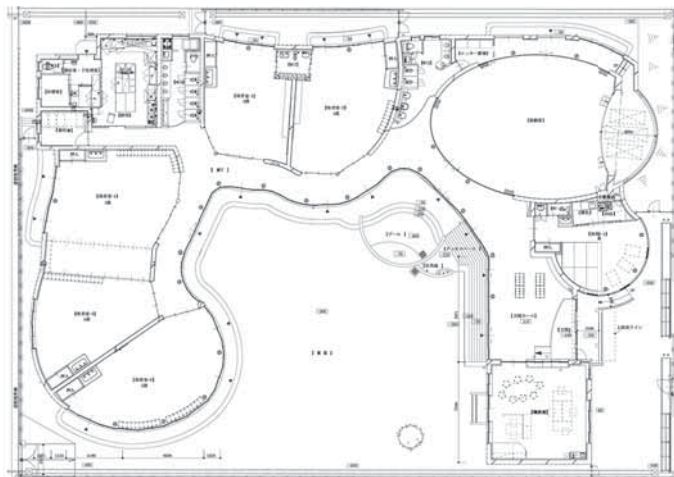
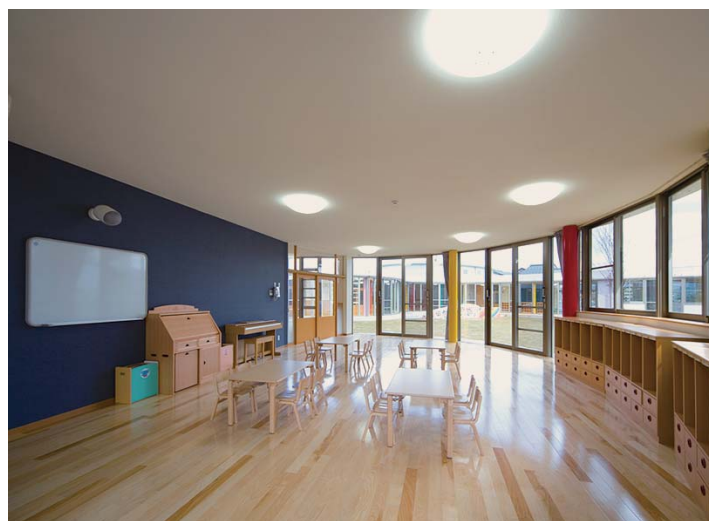
閑静な住宅街の中に建つめいりん保育園は、狭い敷地の中に少しでも多くの光や風を園舎いっぱいに取り込むこと、近隣に対しても今まで生活していた時に感じられていた光や風をこの建物が出来ることによって遮られない様に高さを押さえ、視覚的空間を広く感じられるように設計した。

極力直線は使わず、曲線を多用することで、子供たちにとって優しい空間になるように計画した。また、廊下も曲線にすることで、歩きながら色々な光の入り方、風の入り方が身体で感じられるように考え、視覚的にも楽しい空間となるようにした。

遊戯室は、廊下とも一体になる様に移動式のスクリーンを使用することで、お遊戯会のときに保護者の人たちが多く参加出来る様にした。また、職員室は園のcockピットに当たるところなので、建物全体を見渡せることが出来る場所に設置し、安心安全な園舎作りに努めた。

子供は5～6歳までに人間の感性の6割以上が出来ると言われている。この時期に、良い空間の中で豊かな感性を磨いて欲しいものである。

まちをつくり、人をつくる。その為に私たち建築家はいろんな事に挑戦しつづけていく事が必要だと思う。





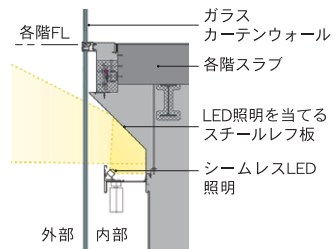
建物メインファサード。ガラスカーテンウォールによる透明感のあるオフィスビル。各階ライトチューブにより周辺を照らす。

MAGIC SQUARE

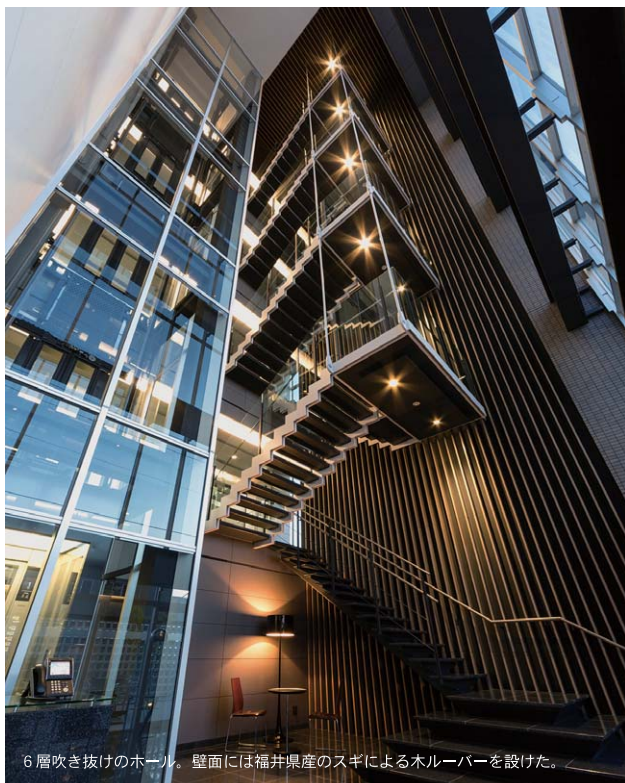
設計監理：(株)木下設計
 施工：(株)見谷組

建築位置：福井市問屋町
 工期：'14年2月～'15年8月
 構造規模：鉄骨造・地上6階
 敷地面積：618㎡
 建築面積：372㎡
 延べ面積：1,291㎡

事務・倉庫・研修機能を持つ、6階建てのオフィスビル。周辺の田園や山々等の自然豊かな環境を内部に取り込んだ、居心地のよい空間創出をコンセプトとした。外壁にはガラスカーテンウォールを採用し、田園・山々への眺望と採光を確保した。また、各階のスラブ下に間接照明による「ライトチューブ」を設け、周辺の街に明かりと暖かみを生み出す計画とした。ホールは6層吹抜けとし、開放感のある空間とした。また、ウッドデッキ・屋上広場・ラウンジ・テラス等、来客や社員のコミュニケーションを誘発する空間をつくりだした。



図：「ライトチューブ」のディテール



6層吹き抜けのホール。壁面には福井県産のスギによる木ルーバーを設けた。



5階役員室。南と東の2方向の田園に開かれた空間。



来客や社員のコミュニケーションを誘発する、ガラスブロックに包まれた1階ウッドデッキ。



大山クリニック

設計監理：小笠原弘建築計画
 構造設計：清水一磨建築設計室
 施工：(株)活衛工務店

建築位置：福井市
 工期：'14年6月～'15年2月
 構造規模：鉄骨造・地上2階
 敷地面積：2,074 m²
 建築面積：429 m²
 延べ面積：461 m²

昨今、通院患者透析病床の不足を招いているため、地域密着型の診療所併設の透析センターが求められている。そのような背景のもと、福井市中心部にほど近い大通りより一本隔てた閑静な住宅地に、診療所併設の透析センターを建築する事になった。

外観は白と濃いグレーを基調にし、極力色を入れない配色にした。外構には、駐車場の中に植栽として、姫シャラを乱に植えている。将来それが育ち林の中の診療所になるようにした。

内部は、白とダークブラウンを基調にモダンに仕上げ、落ち着いた空間に仕上げた。



CUBOID・HOUSE

設計監理：株式会社アルス建築事務所

構造設計：T.S建築設計

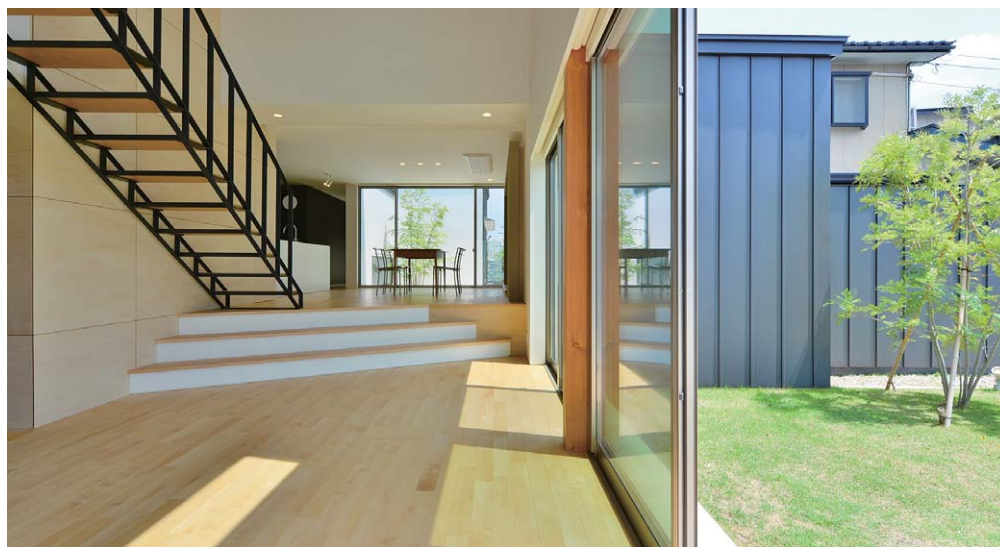
施工：株式会社深谷

建築位置：福井市日の出
工期：'14年7月～'15年2月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：346㎡
建築面積：135㎡
延べ面積：190㎡



「関係性のデザイン」

建築をつくることは、人とまち、人と自然、人とひとなど、その「関係性」に何らか「かたち」を与えていくこと。快適な空間を創造するために、設計者のすべきことは、人とそれらの「関係性」を釣り合いのとれた最適なものへと調整していくこと。「関係性のデザイン」から「そこでしかできない〇〇」へそこに既にあるアイデンティティを再定義、見直し、それらを設計者の発想やアイデアで新たな関係性として構成し直すことから、そこでしかできない建築、そこでしかできない空間、そこでしかできない体験 を創りたい。





現代美術館の家

設計監理：F.A.D.S

施 工：(株)松田工務店

建築位置：福井県

工 期：'13年9月～'14年10月

構造規模：RC造・地上1階

敷地面積：264 m²

建築面積：137 m²

延べ面積：136 m²

一筆書きで巡るシームレスな空間構成：

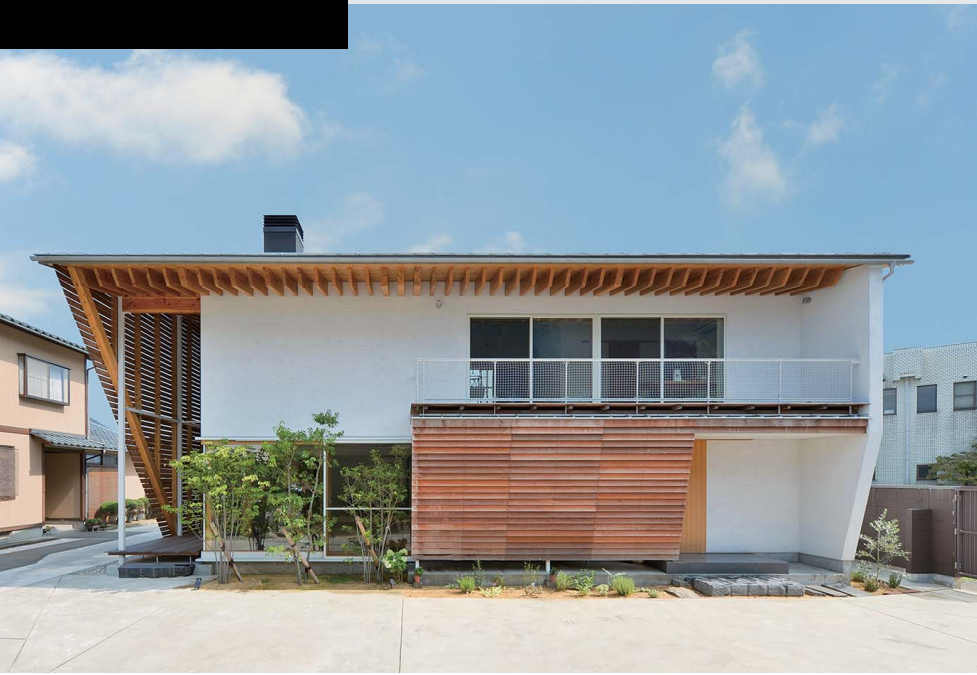
「美術館のような住宅を建てたい。」という、絵画鑑賞と絵を描く事が趣味の建築主のための住宅です。それぞれの空間に飾られた所蔵作品を見て行くと、まるで美術館の展示室のように住宅を一筆書きで巡ることができます。外部からの視線を遮りたいという建築主の要望を満たしながら、風や光が抜け、シームレスで重層性のある空間構成としました。

自然通風を促進するためのふたつの庭：

自然通風を促進するために、南に位置した暖まり易い庭と、北側にある冷たい庭という、温度差の生じるふたつの庭を設けました。北庭からの新鮮な風は、家中を通過して、最後にアトリエから南庭へと吹き抜けて行きます。

写真撮影：上田 宏





村国の切通し

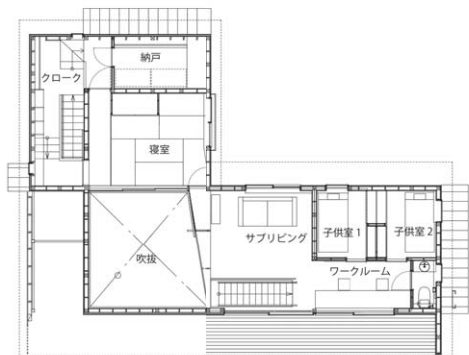
設計監理：丸山晴之建築事務所
 施工：株式会社 木だて家

建築位置：越前市村国
 工期：'14年4月～'14年10月
 構造規模：木造・地上2階
 敷地面積：389㎡
 建築面積：101㎡
 延べ面積：149㎡

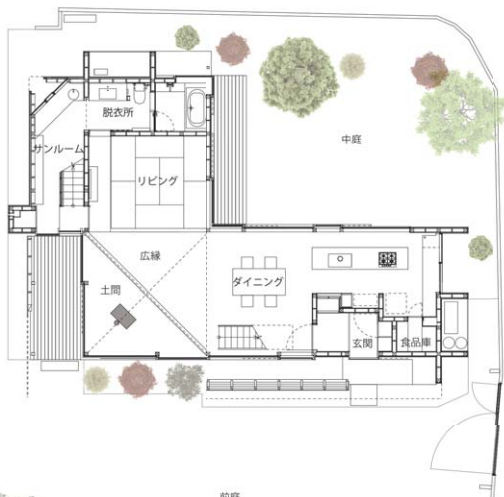
計画地は幹線道路の裏手にある古い集落。敷地には車庫・倉庫の他に住宅が2つあり、両親が住む方を残し、空家となっていた古い方を解体して若夫婦の住まいを新築する計画。計画の拠り所としたのは2つの大きな外的要素。1つは古い母屋が抱きかかえるようにしてあった「和風庭園」。もう1つは、その和風庭園と斜に位置する一家の「御神木」。

通常は住宅のボリュームによって遮断されてしまう、この2つの要素。それらを結び付ける為の「切通し」を配置計画上の重要な骨組みとして捉え、生活のあらゆるシーンが「継承される庭」と「家族を見守る御神木」とともにあるように計画しました。

しかしながら、着工の2週間ほど前に御神木が折れてしまい、対としていた和風庭園も無くして現代的な庭につくりかえることに。初期の設定は崩れてしまいましたが、対の2面を開放的に設えた住宅には、日々、多様な景色が展開しています。2階は村国山を望むことのできる場所にサブリビングを配置。子供室や玄関などは必要最小限の大きさとし、生活におけるパブリックな部分を開放的かつ連続性のある空間として確保しています。



2階平面図



1階平面図
 S=1/250

